

2013年度 センター試験 倫理 (本試験) ワンポイント解説

第1問	問1	現代社会では、組織は(公的私的を問わず)大量の情報を収集し蓄積しているため、プライバシー侵害の危険性は高まっている。
	問2	情報に関連する機器やサービスを利用する能力の差を、情報能力の格差(デジタル・デバイド)という。
	問3	発達段階には〔乳児期・幼児期・児童期・学童期・青年期・壮年期・老年期〕の8つがあり、各段階に応じて達成されるべき課題がある。乳児期の課題が他者に対する基本的信頼の獲得であり、青年期の課題がアイデンティティの確立である。
	問4	現代の家族構成では、未婚や高齢世帯における配偶者との死別などが原因による、単独世帯が増加中であり、「一人で住んでいる人の割合は低下」や「高齢者の単独世帯数は減少」は誤り。いわゆる夫婦別姓は、議論されているが制度として導入はされていない。
	問5	ア・マズローの欲求階層説によれば、欲求は〔生理的欲求 安全 所属・愛情 承認・自尊心 自己実現〕へと段階的に発展する。イの「力への意志」はニーチェの思想。ウ・マーガレット・ミードは、青年期の心理は普遍的ではなく、社会的条件に左右される、と考えた。エ・ユングの思想で、集合的無意識とは、人類の太古からの経験が蓄積され受け継がれて生み出された普遍的イメージを意味し、後天的に獲得されるものではない。
	問6	図の壮高年層をみると、状況説明が5割を越え、行動の促しが10割なので、複数の意図が含まれる回答をした者の割合が半数以上となる。
	問7	「対話的理性」とは、対等な立場で、自由に話し合い、共通理解に基づいて合意を作り出す能力であり、道具的理性の対立概念である。
	問8	リード文から、活動は「人と人とが直接関わり合う」「公的な営み」であり、引用文には「語り合うことによって...自分の姿を現す」とあるので、抗議を通して、人と直接関わり合い語り合っている行為をしている が正解。
	問9	「言語ゲーム」とは日常生活で行われる会話を指す。言語ゲームの規則は、実際に参加しなければ理解されないとされる。
	問10	カルヴァンの予定説によれば、森羅万象は神の予定に従い、人間の善行とは関わりがない。民芸運動を主導したのは柳宗悦。
	問11	Cは、直接向かい合って、自分の姿を見せて誠実に関わることを述べており、「いつでも会うことのできる親しい間柄」であるべきとは言っていない。Bは、誠実に相手と向かい合って自分の考えをきちんと言葉で伝えるべきことを主張しており、「言葉を上手に使いこなす技術」に言及していない。Aは、ネット上の対話によって、誰とでもやり取りを行ない、人と関わり合いながら自己を形成し、自由に意見をやり取りすることができると言っているが、「他者に配慮する態度を養う」ことには触れていない。
第2問	問1	ストア主義の「自然に従って生きよ」とは「理性に従って生きよ」と同意であり、情念に左右されない理性的な態度を指す。 はプラトンの魂の三分説を指す。
	問2	パウロの信仰義認説は、苦行・キリスト教三元徳・三位一体説とは直接的には関係のない考えである。なお、パウロは三元徳の中では特に愛を重視している。

	問3	六波羅蜜は、大乘仏教の6つの徳目であり、布施・持戒・忍辱・精進・禪定(利他ではない)・智慧をいう。ブッダは諸法無我と述べて「永続する自己」を否定した。道諦の本質は中道であり、その詳細が八正道であるが、中道においては苦行が否定される。苦悩を引き起こすのは煩悩であり、煩悩は無我や無常に対する無知に由来する。
	問4	孔子は道を道徳と捉え、その本質は忠(まごころ)と恕(思いやり)にあると考えた。孟子は性善説を唱え、人間は生まれつき四つの善なる性質〔惻隱の心(憐れみ)・羞惡の心(悪を恥じ憎む)・辞讓の心(へりくだる)・是非の心(善悪・不正を見分ける)]を持っていると主張した(四端説)。
	問5	引用文の「(母も含めて)アダムにおいて死んだすべての魂の罪」とは、万人が生まれつき背負っている原罪のことであり、「一部の悪しき人々」のものでなく、また「彼女の犯した罪」でもない。また引用文の「憐れみが裁きに勝りますように」は、の「恩寵によって裁きを免れ得る」に相当する。
	問6	ア・断食は、ラマダーンの月に日の出から日没まで何も口にしないことである。イ・イスラーム教はムハンマドを始祖とするのであって、イエスではない。ウ・イスラーム教はユダヤ教やキリスト教よりも偶像崇拜の禁止が徹底されているので、アッラーの肖像画は好まれない。
	問7	孝・悌が損なわれるとして兼愛を批判したのは、儒家である。
	問8	プラトンのエロース、アリストテレスのフィリア、キリスト教のアガペーの相互比較である。「創造」はキリスト教用語で、神が万物を創り出す行為を指す。「観想」とは、個人的利益とは無関係に事物の本質を理性的に考察するという意味である(アリストテレス)。また、友愛(フィリア)はポリス結合の原理であって、あくまでも同じ共同体に暮らす人々がその対象なので、「すべての人」を対象にするものではない。
	問9	「理性的に情念を制御する」は第二段落内容であり、「相手の苦しみ悲しみに共感」は第三段落内容であり、「他者との交わりに自ら進んで身を投じる」は第四段落内容である。
第3問	問1	日本の古代思想では、唯一絶対の神を想定しない。また天地万物は「おのずから」次々と生じ発展するものとされ、神々は事物に影響を及ぼすことはあるが、「世界に存在するすべてのもののあり方を定めている」ということはない。
	問2	因果応報とは、人間の行為(カルマ)によって、その人間の幸・不幸が決定される、という考え方である。
	問3	末法とは、鎌倉時代に広まった思想であり、教(ブッダの教え)・行(その教えに基づく修行)・証(教えの証しである悟り)のうち、教だけが残っている、乱れた時代を指す。
	問4	存心持敬とは、朱子の影響を受けた林羅山の思想で、心中に常に敬を保ち、上下定分の理を体現する態度を指す。
	問5	いずれも江戸時代の著名な思想家であるが、受験倫理では一般にマイナーである。貝原益軒は、博学で知られた朱子学者であり、朱子学の合理的実証的精神を持っており、本草学・教育・政治経済の分野で業績を残した。山片蟠桃は、懐徳堂(塾の名前)に学んだ蘭学者で、合理主義者として著名であり、地動説や需給の法則を説き、また無鬼論(無神論)を提唱した。三浦梅園は、儒学(朱子学)と蘭学を融合し、自然哲学としての条理学を構築した。
	問6	西周の引用文には「理に二通りあって、その理が互いに少しも関渉しない」とあるので、「両者は異なる原理に立つ」に相当する。

第4問	問7	北村透谷は、自由民権運動に挫折して基督教に入信すると、文学に没頭した。透谷は実世界を否定して想世界の自由と独立を説き、一種の恋愛至上主義を唱えた。
	問8	西田幾多郎のキーワードとしては、純粹経験・主客未分・善・人格の実現・絶対無の場所、などが重要である。
	問9	リード文の内容は、筋道に沿って考え、思考を深め、あるべき世を求めて物事を貫く道理を追求し、世界を認識する主体のあり方を問い、世界と自己のあり方を問い直す、といった内容である。「懐疑的立場」を保持することでなく、「自国の文化の固有性を否定」することでもなく、「世界の移ろいと『理』とを一体的に理解すること」でもない。
	問1	はエラスムス、はカルヴァン、はピコ＝デラ＝ミランドラである。
	問2	種族のイドラは「人間に共通する自然的な制約から生じる」ものであり、洞窟のイドラは「各人が各様にもっている経験や知識から生じる」ものであり、市場のイドラは「人間相互の交わりや社会生活から生じる」ものである。
	問3	諸国家の制度を比較し、三権の抑制と均衡を説いたのはモンテスキューである。学問や技術を集大成した百科事典(百科全書)の出版に尽力したのはディドロである。素朴な感情である憐れみの情が文明の発達につれて失われる、としたのはルソーである。
	問4	物自体とは、認識する主観とは独立した、それ自体として存在する物であり、考えられることはできても認識されることはない。因果関係が主観的信念に過ぎない、としたのはヒュームである。カントは、靈魂や神などは理論理性ではなくて実践理性の対象である、と考えた。
	問5	ミルは、多数派が個性を抑圧する危険性に気づき、個人も社会も幸福に至るためには、個性の自由な発展が不可欠であり、他者に危害を加えない限りは何をしても自由であると主張し(他者危害の原則)そこには愚行権も含まれると考えた。
	問6	マルクスによれば、人間は本来、労働を通じ、社会関係において相互に結びついて生活する存在(類的存在)であるので、「他人と関わらず独立して生きる存在」ではない。は労働からの疎外、は物神崇拜をいう。
問7	ハイデッガーのキーワードとしては、不安・ひと(ダス・マン)・日常性・死への存在・存在忘却・故郷喪失、などがある。ルサンチマンはニーチェ、絶望はキルケゴール、人倫は儒教またはヘーゲルの用語である。	
問8	ボードリヤール(20世紀フランスの社会学者)は、商品を使用価値としてではなく、他者との差異を示す記号として理解した(差異の原理)。ブランド品は便利であるというよりも、むしろ他者との差異を表すバーチャルな価値を有する。フランクフルト学派(ホルクハイマー、アドルノ、ハーバーマスなど)は、実現すべき目的のための手段に墮している理性(道具的理性)を批判し、本来、理性は実現すべき目的を批判的に検証するものである(批判的理性)と主張した。また、ウェーバーによると、近代合理主義が徹底化されて発生した官僚制が、現代人を管理する危険性がある、と指摘した。	
問9	リード文では、権威や価値を鵜呑みにしない、政治や社会に対しても批判的な眼を向ける、権威の正当性を問いたず、このような批判精神が自由で平等な社会を目指す推進力となる、同時にこのような社会が理想を裏切ることもあり得る、と記されている。また、社会や自己を問い直すことで現状とは異なるあり方が可能であり、そのためにも、批判は社会の現実や自己のあり方から目をそらさずに理想を追求する営みである、とも述べられている。の「権威から学」ぶのではなく、の「批判の活動それ自体を否定する」のでもなく、の「自己にとっての真実を追究」するだけでもない。	